



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	研究のプロセスからみた論文の書き方の工夫(fulltext)
Author(s)	朝倉,隆司
Citation	日本健康相談活動学会誌, 8(1): 22-27
Issue Date	2013-05-30
URL	http://hdl.handle.net/2309/134370
Publisher	日本健康相談活動学会
Rights	本論文の著作権は『日本健康相談活動学会』にあります。 。

特別寄稿

研究のプロセスからみた論文の書き方の工夫

朝倉隆司
東京学芸大学

Writing a Research Paper Grounded on the Research Process

Takashi ASAKURA

I なぜ論文がうまく書けないのか

論文の書き方に関する書籍は、医療系、心理学系をはじめ何冊も出ている。また、インターネット上のウェブページを検索してみると、さまざまな学問分野において、論文の書き方を解説したサイトが数多く見つかる。卒業論文や修士論文に取り組む学生をターゲットに書かれたものであろう。しかし、初心者のみならず、研究論文を書き上げるのは、決して容易なことではない。では、学術雑誌に掲載される水準の研究論文が上手く書けない理由は、どこにあるのだろうか。この論文では、すでに出版やウェブ上で公開されている論文の書き方との重複もあるが、研究のプロセスに焦点を当てて論文の書き方の要点を述べてみたい。研究論文とは、研究プロセスの要点をまとめたものなので、前後の脈絡、繋がりを考えて構成するというのは、当然のことではある。

さて、これまでの自身の経験を振り返ってみると、上手く書けない理由は4点ほどあげられる。まず、論文のスタイルの問題が挙げられる。どのセクションに何を書けばよいのかという内容に関することと、どのような形式（スタイル）で書けば良いのかという論文の論理構成の展開に関する事柄である。2点目は、どうまとめたら論文を書きやすいのかという、論文の焦点の絞り方である。3点目は、論文全体の整合性、一貫性をもたせて書くことの難しさである。4点目は、どのよ

うな水準で書けば良いのかである。査読（審査、ピアレビュー）がある論文では、どの程度の水準で研究のオリジナリティや厳密さを要求されるのかがわからず、考えすぎると気後れして、書けなくなることもある。なお、2点目から4点目までは、相互に関連している。

もちろん、大学教員でさえ、文献をじっくりと読み込んだうえで研究論文の執筆に取り組む時間的ゆとりが失われている現実があり、学校現場の養護教諭が研究論文を書き上げるには、相当の努力を要するであろう。論文を書くための適切なトレーニングや指導者、養護教諭のためのテキストの不足も、要因にあげられる。このような時間やトレーニング、指導者、テキストの問題は、重要な課題であることは間違いないが、本論文の範囲を超えている。

この点に関しては、日本健康相談活動学会が2012年夏に実施した「論文書き方セミナーPart 1」の第2弾が2013年に計画されており、このような学会等が主催するセミナーに参加することを推奨したい。

II 読みやすいスタイルとは

どのセクションに、何を書けばよいのかは、すでに「研究の進め方、論文の批判的読み方と書き方のポイント」¹⁾で述べた。ここでは、論文の書き方の形式（スタイル）を取り上げる。文章で論理

展開をするには、おおきく2通りのスタイルがある。いわゆる帰納的スタイルと演繹的スタイルである。前者では、様々な事実を例示しながら、最後にそれらから〇〇であると、要約文を書いてまとめる方法である。たとえば、本論文のIを帰納的スタイルにすると、具体的な4つの内容を記述した後で、「以上の4点が、これまでの経験から考えた研究論文が上手く書けない理由である」と最後に要約する。このスタイルでは、パラグラフ（ひとつのアイデアや論点を示すまとまり）の内容を包含しながら最後にトピックセンテンス（そのパラグラフで述べる主題）でまとめる。したがって、書き手は、書きながら要点を絞っていったように見える。

一方、後者は、トピックセンテンスを書いて、それを説明して論理を展開していくスタイルである。本論文のIは、厳密ではないが、この形式を意識して書いてみた。読者の興味を引くための導入である第1段落後、これまでの経験から考えた研究論文が上手く書けない理由が4点あることを、第2段落の最初に述べている。このように、以後に論じていく主題を先取りして述べ、その説明を加えていくスタイルになる。基本的に、ひとつのパラグラフあるいは話題の記述のまとまりには、ひとつのトピックセンテンスを対応させて書く。研究方法、すなわち質的研究か量的研究かにより書くスタイルは異なるはずだと考える者もいるであろうが、基本的に研究論文や報告書は、このスタイルで書くと考えて良い。

確かに、前者のスタイルは、執筆者が自分の頭で考えている流れで書くので、書きやすく、しかも書いている本人にとっては自然な展開なのでわかりやすい。しかし、初めて読む者にとっては、行き先を告げられないまま道案内されるのに似た不安を感じる。要するに、すでに内容の展開を知っているからこそ、読みやすく、理解しやすい。ここに書き手が陥りやすい錯覚がある。したがって、読み手に文脈を先に明示して、その後に詳細を展開していく後者のスタイルの方が、初め

て内容に触れる者にとっては、よりわかりやすく感じられる。要するに何が言いたいのか、アイデアがストレートに伝わる。この作文技術は、卒業論文や修士論文を執筆する際にマスターする必要がある。筆者の場合は、木下是雄「理科系の作文技術」²⁾が出版された頃に大学院生として過ごしており、この本を手元に置いて論文のパラグラフを作成していった。このような書き方をパラグラフ・ライティングという³⁾。しかし、すぐにパラグラフ・ライティングの要領で書き出すのは難しい。

現在は、筆者が過ごした大学院生時代と異なり、パソコンが普及し、ワードなど文書用ソフトを使って論文を書くため、手書きのメモや下書きをして、それから文章を作成する習慣が乏しくなっているのではないか。そのため思考の流れにそって文章を書きやすいように思う。多くの者がこのような書き方の癖を身に付けている。したがって、意図した以上の長文になってしまう。そこで、文章を書くに当たり、その一文や段落、あるいは論旨やアイデアを述べたひとまとまり（パラグラフ）などで何を言いたいのか、大まかな構成やストーリーに関して要点を、できれば手書きでメモすることを勧めたい。また、思考の流れにそって書いた文章であれば、それをパラグラフ・ライティングの観点からカット&ペーストの機能を使って再構成し、トピックセンテンスが先になり、その詳細が後に続くように編集することを勧めたい。この作業を継続して行うのが、論文の推敲である。すなわち、再構成しては、最初から修正したその場所まで論文を読み直しては、論理の展開を吟味する作業を続ける。

Ⅲ 論文の焦点の絞り方と一貫性・整合性を保つ工夫

調査研究は、目的を絞っていても、質的研究、量的研究ともに大量のデータが生み出され、データの海に溺れる危険に曝される。したがって、そこから生み出される結果も、相当の量になり、論

旨が多岐にわたり、論点がぼやけたり散漫になったりしがちである。問題意識や現場経験が豊富であるほど、案外脇道にそれやすい。では、論文の焦点を絞り込み、一貫性、整合性を保たせるにはどのように工夫したらよいのか。もちろん、どこに論文の焦点を当てるかは、その研究のオリジナリティとも深く関係した問題であり、IVでも言及する。

焦点の絞り込みが難しいと感じたり、論文の一貫性、整合性に問題が生じたりする場合は、研究のプロセスを見直してみると良い。そもそも何を明らかにしたくてこの研究に取り組んだのかを問い直すことである。図1の①から⑥は、調査研究を例にして、仮説（問題意識）の設定から考察までのつながり、すなわち研究のプロセスを表している。

まず図1を説明すると、問題意識に基づいて仮説を作り（図1の①、以下同じ）、仮説を構成す

る質問項目を作成して調査票にする（②）。したがって、調査票から得られたデータは、仮説に対応していなければならない（③）。それから、仮説に対応する変数を用いて、時には事前に想定した分析枠組みに従って、統計解析を行う（④）。統計解析から得られた結果は、仮説を検証する過程で生み出された中間産物としての結果もあるが、基本的に得るべき結果は、問題意識や仮説の直接的な解答となる結果である（⑤）。そして、考察の対象となるのも、原則として、問題意識や仮説の解答となる結果であり、中間産物としての結果ではない（⑥）。結果の一般化可能性や内的妥当性を評価するために、調査や測定の方法、対象者の構成やサンプリングについて考察することはもちろんありうる。論文を書くとは、これらの①から⑥のプロセスのパートを文章と図表を使って表すことに他ならない。

図1では①から⑥までの流れの矢印を一方向に

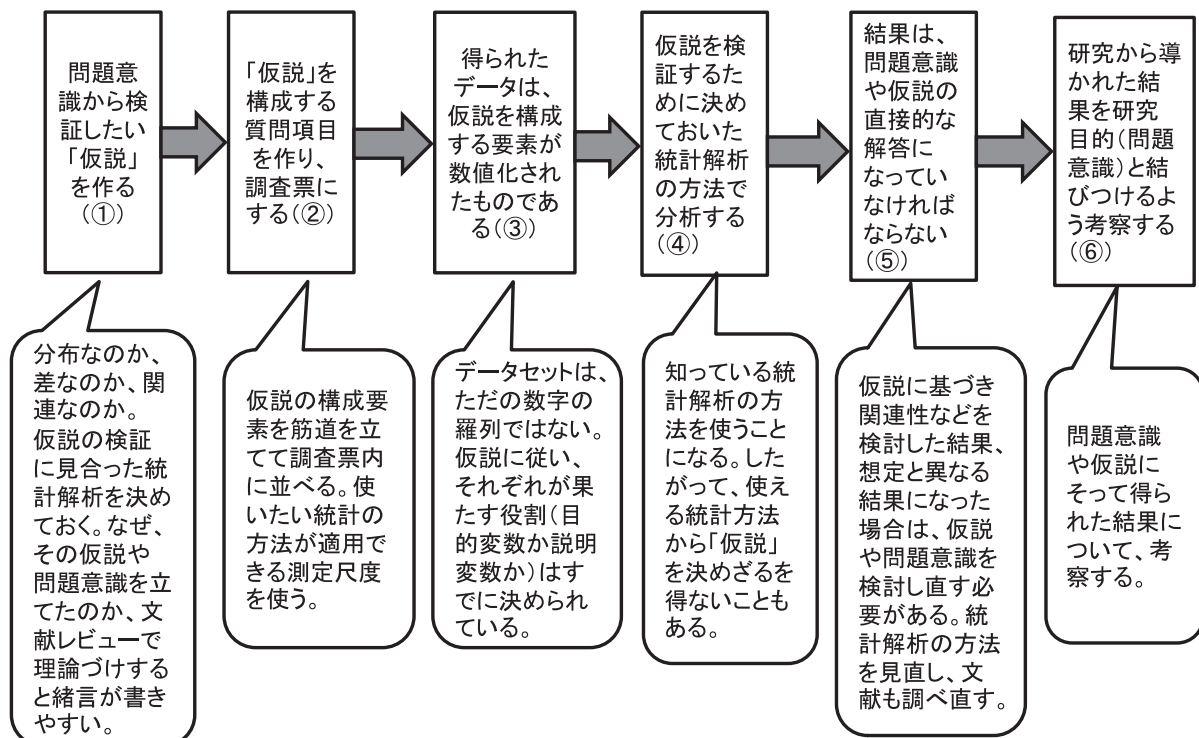


図1 仮説から調査票、データと統計解析、結果、考察までのつながり

注) 目的変数とは、説明したい現象を表す変数、予測したい変数で、ものごとの結果と見なす変数のこと。例：抑うつなどストレス反応。一方、説明変数とは、目的変数の原因・要因と想定している変数。例：友人関係のトラブルなど学校生活におけるストレス。

描いたが、実際の研究の過程では、隣り合っている各パート同士、あるいは離れたパート間において、フィードバックし合う関係にある。たとえば、焦点を絞って論文を書くには、①の問題意識や仮説に立ち戻って、常に何を結果として出せばよいか(⑤)を意識化することが重要である。逆に、結果の図表が多すぎる場合などは、問題意識や仮説が漠然としていないか、多岐にわたりすぎていないか、もっと限定する必要があるのではないかと、図1の⑤から①にフィードバックをかける必要がある。もちろん、仮説に基づく分析から予測した結果が得られない場合は、観点を変えた分析から得られた論文になりそうな有望な結果に基づいて、問題意識や仮説を大幅に設定し直すこともよくある。結果あってこそその論文である。採用すべき結果を決めて図表を作成するところから、論文作成を始めていくと、焦点を絞りやすく全体構成も決めやすい。“要するに何がわかったのか”、研究の落としどころが分かると焦点が明確になるからである。なお、再構成した場合は、新たな結果に基づき文献検索をやり直すことが多い。

要するに、論文の焦点を絞り、整合性のある論文を書くには、まず研究計画の段階から、実際にデータ分析を行って結果が得られた段階において、その都度①から⑥までのプロセスを行ったり来たりして、吟味する作業を行う必要がある。研究の焦点やそのプロセスに一貫性がなければ、書かれた論文に焦点や一貫性が欠けていても不思議はない。すでに調査が終わりデータを得てしまった段階にある場合でも、改めて研究の焦点やそのプロセスの一貫性を持たせるべく、再構成し整えていく必要がある。それぞれのパートが、どのように論理的に噛み合うのかを、よく考えメモを取っておくと、論文を執筆する際に役立つ。具体的な工夫としては、結果、考察において目的と一致した小見出しをつけて書くべきことを一致させることである。少なくとも目的の記述に使ったフレーズを使って結果、考察を記述する。

ただし、論文の結果を絞り込み、ひとつの研究から数多くの論文を出そうとすると、研究が細切れでダイナミックさに欠けてしまい、読んでいておもしろい論文ではなくなる。このような論文は、サラミ論文として批判されている。サラミ論文とは、ひとつの研究からできるだけたくさんの論文を出そうとして、ひとつの研究をサラミのように薄くスライスして小出しにした論文のことである⁴⁾。

Ⅳ 研究のオリジナリティを示すには

1 オリジナリティとは

養護学に関連した研究は、少なくともその重要な部分は、Health serviceに関する研究ではないかと考える。すなわち、研究課題として、養護教諭が提供する健康サービス(指導や教育などを含む)に関する問題、それを提供するシステムなど仕組み・制度・環境に関わる問題、それを提供する専門職としての問題、さらに受け手や社会的相互作用の問題などがある。このような観点からすると、養護学を社会科学系の学問として位置づけることが可能である。

では、社会科学系の研究におけるオリジナリティとは何だろう。

自然科学系では、発明発見(あるいは再発見も含まれるかもしれない)であり、新規性や独創性はより明確である。自然科学系の実験による発見、数式やシミュレーションによる理論モデル、新物質の合成など発明は、基本的には条件の統制が問題になることは稀である。確実にオリジナルな研究であるのか、確認することが可能である。したがって、論文の捏造も発見可能である。

それに対し、社会科学系においては、何が新規性であり独創性であるか、それほど明確ではない。社会科学系は、行動科学であっても、厳密に統制することが困難であり、理想的な条件で調査や測定を行うのは不可能と言って良い。たとえば、調査ではランダムサンプリングを実施し回答率が80%であっても、残り20%が同様の傾向にあ

るかは保証できない。したがって、誤差範囲が広い。しかも、日本では、全国規模のランダムサンプルによる調査は、ほとんどない。社会文化などローカルな研究の場の特性が影響することも考えられる。よって、常に研究条件に瑕疵や制約があり、自然科学と同等の厳密さや普遍性、一般性をもって検証することはできない。残念ながら、研究者が科学的と言う場合、自然科学系のモデルが想定されがちである。

2 文献レビューによる位置づけから生み出すオリジナリティ

前置きが長くなったが、まず研究のオリジナリティを出すには、論文の書き手として、どのように研究のオリジナリティを示し、論文を書けば良いのかという問題がある。これまでの研究を踏まえて、何を新しく付け加え進展させたか、違いを明確にすることである。この点については、はじめに（あるいは緒言）において、文献レビューを行い、これまでの成果と未達成の課題を明確に記述し、それを踏まえて目的設定することである。社会科学系としては、それがどのような点で社会にとって意義があるのか明確に述べられていることも、オリジナリティの大事な要素であろう。一般に“役に立つ”と表現されるが、実用的な効用のみに限定されるべきではない。その目的の適切さと、どの程度達成したのかを、論文中で論理的かつ説得力を持って書くことができるかが、オリジナリティに深く関わってくる。

ここで論文を書く際の工夫を挙げるとすれば、研究テーマにおいて重要であり、かつ乗り越えるべき論文（鍵となる論文）を見つけ、適切に吟味し批判することである。その研究の意義を認めつつも、問題点を示し、それを本論文でどのように改善して、知見を進展させようとしたかを述べることである。また、研究間の隙間を見つけるのも良いだろう。いずれにせよ、文献レビューを行い、欠けている点を明確にし、自分の研究がそれを充足または補完することを示すのである。その着想や批判的思考のプロセスに独創性が認められ

るかが、重要なポイントになると考える。

調査研究であっても、ただあることを調査してデータにより経験的に検証するという展開にしないで、ある理論や概念に基づいて研究を位置づけられるような文献のレビューと目的を書くようにすると良い。調査を行えば何らかの意味で新しい知見は得られるだろうが、それが先行する研究蓄積におけるどのような理論や概念を使った文脈に位置付くのかを、明確にすることである。このような鍵となる論文や理論、概念が見つけれないまま研究を行うのは、非常にリスクである。なぜ、そのような研究がこれまでにないのか、をよく考えてみる必要がある。研究する必要性が低い課題、現象が複雑で簡単には取り組めない研究課題なのかもしれない。したがって、できるだけ既存の知識体系と具体的に関連づけるように目的、研究枠組み、調査内容を調整する方がよい。言わば、既存の知識体系と自分の研究の間に“橋を架けておく”必要がある。

3 オリジナリティを見極める査読の質の向上

同時に、書き手はオリジナリティがあると考えていても、投稿論文の場合は、査読者が書き手と同様の基準あるいは思考でオリジナリティを認めるのか、という問題がある。先に述べた理由から、自然科学の場合はオリジナリティを判断しやすいが、社会科学系の場合は、社会や人を対象にすると研究方法において完璧を期すことができないので、オリジナリティの判断が保守的に傾きやすい。つまり、問題点を指摘しようと思えば、いくらかもあげることは可能である。どのあたりで折り合いを付けるかである。社会科学的なオリジナリティを判断する基準を、もっと議論して深める必要があり、共有する必要がある。

よって、論文をもっと書きやすくするには、書き手の力量の向上ももちろんであるが、査読者の質も改善する必要がある。論文の書き手が主張している目的の適切さと、それがどの程度達成されたのかを、書き手の文脈を十分に尊重しながらオリジナリティを判断する姿勢と見識、そして適切

なコメントをする力量が査読者に求められている。

V おわりに

養護教諭と非常に近い専門職である看護師では、すでに30年以上前から研究熱が高まり、「看護研究」が流行語であった。大学院進学者、博士の学位取得者も増している。したがって、看護学系の学会も増え、数多くの研究が発表されている。看護師の高学歴化が看護ケアの向上に結びついているのかという批判はあるが、看護の専門性の確立と看護学の学問的な発展に向けて進む勢いには、驚くべきものがあるし、敬意を払わざるを得ない。その一方で、大学で養護教諭の養成に関わる者として、養護教諭と看護師の研究活動をめぐる空気の違いに、疑問、戸惑い、時には焦りを

感じる。養護教諭の専門性や学問としての養護学の確立には、現場の実践を支える研究力は欠かせないと考え、微力ながら研究の進め方や論文の書き方について書かせていただいた。2度にわたり執筆の機会を与えて下さった編集委員会にお礼申し上げます。

文献

- 1) 朝倉隆司：研究の進め方、論文の批判的読み方と書き方のポイント、日本健康相談活動学会誌、6(1)、28-33、2011
- 2) 木下是雄：理科系の作文技術、中公新書、東京、1981
- 3) 倉島保美：ブルーボックス 論理が伝わる世界標準の「書く技術」「パラグラフ・ライティング」入門、講談社、東京、2012
- 4) 産業医科大学図書館：投稿規定と国際ルール、2004
(<http://www.lib.uoeh-u.ac.jp/HREC360.pdf>、アクセス2013年3月12日)